

2016年11月20日(日)

説教:「四人目の者」

聖書:ダニエル書3章13～30節

ネブカドネツアル王は巨大な金の像を造った。この像は王の偉大さ、権力を表現し、自らを神格化して拝礼すべきものとした。ひれ伏して拝まない者は、直ちに燃え盛る炉に投げ込まれた。人々は、余りの恐ろしさに拝礼へと向かう。

その恐怖に微動だしない三人の信仰者、ユダヤの若者が描かれている。絶対的権力者の前に無防備で立つ三人の戦いは、傍目には絶望的だ。しかし激怒する王の問いに対して、三人はただ神への信頼を語る。「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます」と言う。でもそのすぐ後に、「そうでなくとも」…と言う。「そうでなくとも」とはどういうことか？ 救いの確信があるのならば、「そうでなくとも」という言葉はいらないのではないか。ここは、自らの救いの確信よりも、救いは神の主権によるもの、自分が主ではなく、神が主であるという確信がそこに告白されているということであろう。

このダニエル書が記された時代は、紀元前150年頃で、シリア戦争、あるいはマカベア戦争といわれる時代。セレウコス朝シリアのアンティオコス4世は自らを「現人神」と称してユダヤの神殿に対し、ゼウス神殿と呼ばせ(ゼウスとは、ギリシャ神話の神々の名)、違反者を死刑にすると命じた。多くのユダヤ人がこの時代に迫害されたといわれている。

物語は、ユダヤの信仰者三人を燃え盛る炉に投げ込ませたにもかかわらず、燃え尽きて消えることはない。それどころか「四人目の者」が火の中を自由に歩いて神の子のような姿をしていた。この物語は、信仰を貫いた三人の勇気が称えられ、王様を回心へと導く物語として終わる。ここは、強要される偶像礼拝に抵抗することの意義、貫いて行くことの勇気を学ぶところだが…。

この物語には、信仰を貫いて迫害を受けた人々への慰めに満ちたメッセージがあるのかと思う。燃え盛る炉に投げ込まれれば、どんな信仰者でも人間であれば、一瞬にして焼けて消えてしまう。この書の時代背景にあるマカベアの時代に、多くのユダヤ人が迫害され、殺され、消えて行った。しかし、信仰は消えなかったのである。三人の者が燃え盛る炉の中に放り込まれても、私たちと共に居られる「四人目の者」がいることを教えている。たとえ信仰者の肉体は消えても、信仰は消えないのである。(神谷)